

簡易型の大豆・麦立毛間播種作業方式

総合研究部 農業機械研究室 電話019-643-3535

研究のねらい

寒冷地における大豆・麦立毛間播種栽培体系の普及を図るため、播種機への初期投資を抑えて簡易に実施できる立毛間播種作業方式を構築する。

成果の内容

- ①本体系の基本条間は120cmであり、使用する乗用管理機の輪距および汎用コンバイン(刃幅2m級)のクローラ中心間距離と合致している(図1、小麦の場合を例示)。従って、麦収穫時の大豆踏圧被害が非常に少ない。1条内に大豆は2列、麦は4列を播種する。
- ②播種機は、市販の横溝ロール式播種機(4条播き、大豆は播種ユニット1台あたり1列、麦は2列播種)のフレームに分枝フレームを2基付加して用いる(図2、図3)。
- ③本方式では播種機に耕起機能が無いので、播種床の形成のため立毛間播種の直前(10日程度前～寸前まで)に中耕を行う。この播種直前中耕は、雑草防除の面からも有効である。

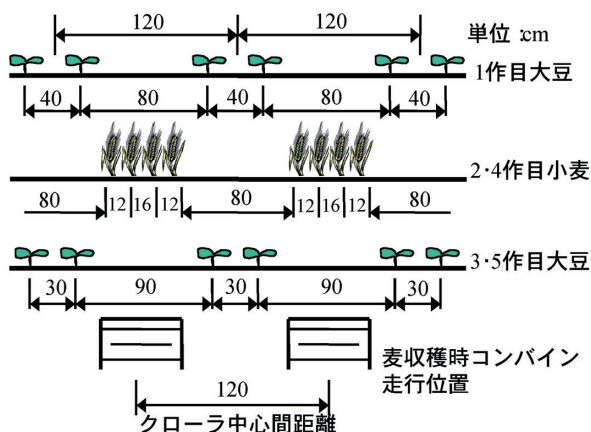


図1 本体系の大豆・小麦3年5作栽植様式

(1作目大豆は土壌処理除草剤使用可なので若干列間が広い)

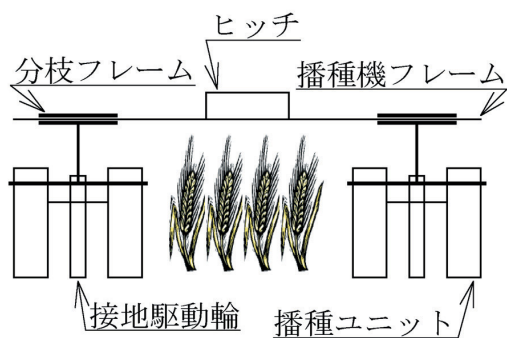


図2 本体系で使用する播種機

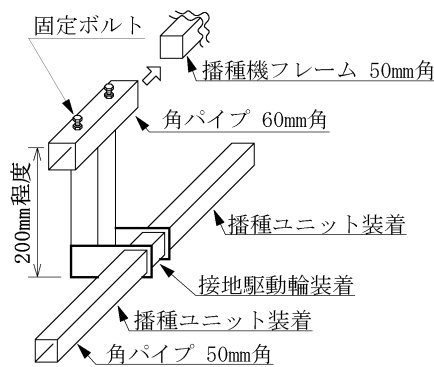


図3 分枝フレーム

成果の利活用

- ①乗用管理機や中耕作業機を既に使用している経営体であれば、新たな機械投資を抑えて簡易に大豆・麦立毛間播種栽培体系を導入できる。
- ②分枝フレームは簡単に製作できる。